



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

「気になる悪魔」

魔よけ。子供の頃からとっても興味のあるアイテムだ。まず「魔」に興味津々の子供だったからかもしれない。なんせ13日の金曜日に生まれたというだけで、小さい頃に行ってた教会で「悪魔の子やん」と神父に言われたのがきっかけだった。

「おいおい、あんた神父ちゃうん？」

と突っ込みたかったが、大阪出身の人だったので、そのへんはジョークで言ったことも理解は出来た。しかし「悪魔の子」呼ばわりされると、

そっちに興味がわくものである。

しかも悪い事に小学校の5年くらいだったろうか、漫画家の永井豪が「魔王ダンテ」という悪魔ものの漫画を連載し始めた。「デビルマン」の下敷きになった作品である。子供心に、神と悪魔の世界を自由に描く彼に憧れたものだった。そうそう、私が漫画を描き始めたのは彼の影響だ。だから描き始めた時は悪魔の絵ばかり描いていた。親もそれを見て、「いや、面白いな」

なんて言ってたものだ。もうちよつと危機感とか感じる！ と当時の母に突っ込みたいくらいだ。子供が悪魔の絵を描いてるのに、のんびりした人である。

ま、そんなわけで、悪魔とか、魔女、鬼、それに関する魔よけのたぐいにはとつても興味がある。悪魔の話は深くなってしまうので、今回は「魔よけ」のことだけを取り上げてみたいのだが：日本にも屋根の上に

鬼瓦を置いたりして、怖い顔をしているものをわざと置いて、悪いものを寄せ付けない風習がある。

祭りの時に鬼に囃んでもらって、子供の無病息災を願うなんて風習もよくある。悪魔も怖がるような怖い風体のものに力を感じる、目には目的な発想である。

西洋にも同じようなものがある。鬼瓦ではないが、ガーゴイルと呼ばれる魔よけだ。ヨーロッパの方に行くと、教会や、古い建物の上の方に突然、奇妙な彫刻が飛び出ているのが分かる。しかも建物に対して90度、垂直に出ているので驚く。下を通る人に見えるようにという発想だろうか。

それだけではなく、イギリスやフランスなどに行くと、玄関の上や屋根のコーナーに悪魔の顔がドンと付いていることもある。さすがは石文化、彫刻の発達した国だからこそそうなるのかもしれない。

実は先日までやっていた芝居で、このガーゴイルをモデルにしてセツトの柱の上に悪魔の像を3体建てたことから、また興味が復活してきた。写真は、舞台美術家がニューヨークで買ってきたガーゴイルの写真集をもとに、スケッチしたガーゴイルだ。

こういう可愛いレリーフもあるので、魔よけの範囲もなかなか面白い。家の柱にカバの顔が付いてるなんて、住んでる人はどういう気分なのか知りたいものだ。

今回は紹介できないが、日本でいうと口を引つ張つてわざと広げ「あつかんべー」をしているような顔のガーゴイルもたくさんある。「悪魔を噛むぞ」ということなんだろうか？ 発想は分かるが、怖いというより面白いものが多く、「これでええんやろうか」と考えるものもある。

この写真を見て「ハリー・ポッターの世界やな」と言った人がいたが、イギリスではそんなものがゴロゴロしているのだから、あの世界感は生まれるべくして生まれたということなんだろうか。

あなたはどうかね？ 家の上にお茶目な悪魔の魔よけが乗っかっていたら嫌ですか？

うちの母は昔、実家を建てる時に大工さんに、

「家の玄関に鬼瓦を飾りたい」

と言い出し、止められたらしいから、私のこういう趣味は母譲りなのかもしれない。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
